

*The Lord's Vineyard*

# 主のぶどう園

真のイスラエルとは？

Revival Booklet Series No.15



リバイバルシリーズ No.15

E. G. ホワイト



SUNRISE MINISTRY

# 目次

キリストの実物教訓 第23章 Contents

---

---

はじめに .....	1
真のイスラエル .....	1
ユダヤ民族 .....	2
今日の教会 .....	20

## はじめに

### 真のイスラエル

エルサレムをめぐって、イスラエルとイスラムの流血の抗争は絶え間ない。世界に離散したユダヤ人たちが約束の地に帰還してソロモン第三神殿は建設されるのだろうか？

「イスラエル国家の建国のために祈り、支援しよう」運動が日本でも大きなムーヴメントとなりつつある。いろいろな見解、グループが存在する。

「もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。」（ガラテヤ 3:28, 29）

「こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう」（ローマ 11:26） どういう意味であろうか？

この記事－「主のぶどう園」は、読者に正しい解決を与えると信じる。

## ユダヤ民族

2人の息子のたとえに引き続いて、ぶどう園のたとえが語られた。キリストは前のたとえで、従順がいかほど重要であるかということユダヤの教師たちにお教えになった。そして、後のたとえでイスラエルに与えられた豊かな祝福をさし示し、それによって、神にはイスラエルに従順をお求めになる権利のあることを明らかにされた。主は、輝かしい神のみ旨を示されたが、それは彼らが従順であれば成就したはずのものであった。主は未来のベールを取り去り、ユダヤ民族が神のみ旨を果たさなかったために、主の祝福を失い、自らの上に滅亡を招いていることをお示しになった。

「ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた」とキリストは言われた。

このぶどう園の描写は、預言者イザヤによっても与えられている、「わたしはわが愛する者のために、そのぶどう畑についてのわが愛の歌をうたおう。わが愛する者は土肥えた小山の上に、1つのぶどう畑をもっていた。彼はそれを掘りおこし、石を除き、それに良いぶどうを植え、その中に物見やぐらを建て、またその中に酒ぶねを掘り、良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ」(イザヤ5：1、2)。

農夫は荒野の中から土地の一面を選び、それにかきをめぐらし、それを開き、耕し、そこに特に選び出したぶどうを植えて、豊かな収穫を期待する。未開



の荒地よりはすぐれたこの土地が、その栽培に要した労苦の実を結ぶことを農夫は待望する。そのように神は世から1つの民を選び、これをキリストによって教育し薫陶された。預言者は「万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、主が喜んでそこに植えられた物は、ユダの人々である」と言っている（イザヤ5：7）。

神はこの民に大きな特権を与え、ご自分に満ち満ちている富によって彼らを豊かに祝福された。神は彼らが実を結ぶことを期待された。彼らはみ国の精神をあらわすべきであった。墮落した邪悪な世界のただ中にあって、彼らは神のご品性をあらわすべきであった。

彼らは主のぶどう園として、異教民族とはまったく違った実を結ばなければならなかった。これら偶像礼拝の諸国民は、ただ悪ばかりに走っていた。彼らは暴虐、犯罪、強欲、圧制を行って、はかり知れぬ墮落のどん底に沈んでいた。腐食した木の結ぶ実は、非道、退廃、悲惨であった。神のお植えになるぶどうの木になる実は、

これとはまったく違ったものでなければならなかった。



神がモーセに教えられたような神のご品性をあらわすことは、ユダヤ民族の特権であった。「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示してください」というモーセの祈りに答えて、主は「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ……るであろう」と約束なさった（出エジプト記 33：18、19）。「主は彼の

の前を過ぎて宣べられた。『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者』」（出エジプト 34：6、7）。これこそ神がその民に望まれた実であった。彼らは純潔な品性と、清い生活と、恵みといつくしみとあわれみとで、「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせる」ことを示さなければならなかった（詩篇 19：7）。

ユダヤ民族を通して、豊かな祝福を全人類に与えることが神のみ旨であった。イスラエルを通して、神の光を全世界に輝かせる道が備えられなければならなかった。世界の諸国は、墮落した習慣におちいることによって神の知識を失っていた。しかし、憐れみある

神は彼らを滅ぼしたりなさらなかった。神は、教会を通して、神を知る機会を彼らに与えようと意図なされた。神は、神の民を通してあらわされる原則が、人間の中に神の道徳的なみかたちを回復する手段となるように計画された。

神が偶像礼拝をしていた親族のうちからアブラハムを呼び出してカナンに地に住むようにお命じになったのは、このみ旨を果たすためであった。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」と神は言われた（創世記 12：2）。

アブラハムの子孫のヤコブとその子らはエジプトに移されたが、それは彼らがこのよこしまな大国の中にあって、神のみ国の原則をあらわすためであった。ヨセフの高潔さと、全エジプト国民の生命を救ったあの驚くべき働きは、キリストの生涯を代表したものであった。モーセをはじめ、その他多くの人々は、神を証しする証人であった。



主は、イスラエルをエジプトから導き出して、再び主の力と憐れみをお示しになった。奴隷の境遇からイ



スラエルの人々を解放するという驚くべきみわざと、彼らを荒野の旅路の間お導きになったことは、ただ単に彼らのためばかりではなかった。それはまた周囲の諸国に対して、実物教訓となるためであった。主は人間のあらゆる権威と偉大さをしのぐお方として、ご自分をあらわされた。神の民のために神が行われた印と不思議とは、自然を超越した神の力を示し、いかに偉大な自然崇拝者をも越えた神の力を示した。神は終わりの時代に地上をお通りになるのであるが、それと同じように、高慢なエジプトの地を過ぎゆかれた。この偉大な「わたしは有る」というお方は、火と嵐と地震と死のうちに神の民をあがなわれた。神は彼らを奴隷の地から連れ出された。神は、「あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地」の旅を導かれた（申命記8：15）。神は「堅い岩」から水を出し、「天の穀物」で彼らを養われた（詩篇78：24）。「主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。主はこれを荒野の地で見だし、獣のほえる荒れ地で会い、これを巡り囲んでいたわり、目のひとみのように守られた。わしがその巢のひなを呼び起し、その子の上に舞いかけり、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、

主はただひとりで彼を導かれて、ほかの神々はあずからなかった」とモーセは言った（申命記 32：9 - 12）。こうして神は、いと高き者の陰に宿らせるために、彼らをみもとに引き寄せられたのである。

キリストは、荒野をさすらうイスラエルの子らの導き手であった。昼は雲の柱、夜は火の柱によって、主は彼らを導かれた。主は彼らを荒野の危険から守って約束の地に導き入れ、神を認めない万国の民の見守るうちに、自ら選んだご自分の所有として、また主のぶどう園としてイスラエルの国の基をおすえになった。

この民に神の託宣がゆだねられた。彼らは、真理と正義と純潔という永遠の原則、すなわち、神の律法によって回りを囲まれていた。これらの諸原則に従順であれば、彼らは守られるのであった。従順でさえあれば、罪の習慣によって自らを滅ぼすことがないからである。そして、国のまん中には、ちょうどぶどう園のやぐらのように、聖なる神殿が置かれていた。

キリストが彼らの指導者であった。キリストは、荒野で彼らと共におられたように、今もなお、彼らを教え導くお方であった。幕屋と神殿において、キリストの栄光は贖罪所の上の聖なるシェキナ（光雲）となって宿っていた。主は彼らのために、豊かな愛と忍耐をたえず現しておられた。



神は、その民イスラエルを、ほまれとし、栄光としようと思われた。あらゆる霊的な便宜が彼らに与えられた。彼らが神の代表者にふさわしい品性を形成するために役立つものは何であっても、差し控えることなく神から与えられていた。

神の律法に従順であることは、世界の諸国の前で彼らに驚嘆すべき繁栄を得させるものであった。すべての巧みなわざをなす知恵と技量を与えることのできる神は、いつまでも彼らの教師となり、神の律法に対する従順を通して彼らを高められるのであった。彼らは、もし従順であれば、他の諸国を襲った疾病から守られ、豊かな知性に恵まれるのであった。神の栄光と尊厳と大能は、彼らの繁栄の中にあらわされ、彼らは祭司と王の国となるのであった。神は彼らを、地上最大の国家とするためのあらゆる必要なものを提供しておられた。

キリストはモーセを通して、非常に明確に神のみ旨を示し、どうすれば彼らが繁栄するか、その条件を明らかにしておられた。彼は言われた、「あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分

の宝の民とされた……。それゆえあなたは知らなければならぬ。あなたの神、主は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵みを施して千代に及ば……。れることを……。それゆえ、きょうわたしがあなたに命じる命令と、定めと、おきてとを守って、これを行なわなければならぬ。

あなたがたがこれらのおきてを聞いて守り行なうならば、あなたの神、主はあなたの先祖たちに誓われた契約を守り、いつくしみを施されるであろう。あなたを愛し、あなたを祝福し、あなたの数を増し、あなたに与えると先祖たちに誓われた地で、あなたの子女を祝福し、あなたの地の産物、穀物、酒、油、また牛の子、羊の子を増されるであろう。あなたは万民にまさって祝福されるであろう……。主はまたすべての病をあなたから取り去り、あなたの知っている、あのエジプトの悪疫にかかせない……。であろう」(申命記7：6、9、11－15)。

もし神の戒めを守るなら彼らに最上の穀物を得させ、彼らのために岩から蜜を出そうと神は約束された。また長寿をもって満ち足らせ、ご自分の救いを示そうと約束された。

アダムとエバは神への不従順によってエデンを失い、全地は罪のためにのろわれた。だが、もし神の民が神の教えに従うなら、その土地は豊饒ほうじょうと美を回復するの

であった。神は、自ら土地の耕作についての教えを、彼らにお与えになった。だから、彼らは回復のために神と協力しなければならなかった。こうして神の支配下であって、全地が霊的真理の実物教訓となるのであった。神の自然の法則に従うことによって、地がその宝をうみ出すように、神の道德律に従うことによって、民の心は神のご品性を反映できるのであった。異邦人も、生ける神に仕えて、これを拝する者たちの優越を認めることであろう。

モーセは言った、「わたしはわたしの神、主が命じられたとおりに、定めと、おきてとを、あなたがたに教える。あなたがたがはいって、自分のものとする地において、そのように行うためである。あなたがたは、これを守って行わなければならない。これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう。われわれの神、主は、われわれが呼び求める時、つねにわれわれに近くおられる。いずれの大いなる国民に、このように近くおる神があるであろうか。また、いずれの大いなる国民に、きょう、わたしがあなたがたの前に立てるこのすべての律法のような正しい定めと、おきてとがあるであろうか」(申命記 4 : 5 - 8)。

イスラエルの子らは、神が彼らのために定められた

地域を、ことごとく占有することになっていた。真の神への礼拝と奉仕を拒む諸民族は、立ちのかわされるのであった。しかし、イスラエルが神のご品性をあらわすことによって、人々



が神に引きつけられることが神のみ旨であった。全世界に、福音の招きが与えられなければならなかった犠牲制度の教えを通して、キリストは諸国民の前に掲げられ、それを見あげる者はすべて生きることができるのであった。カナン人ラハブやモアブ人ルツのように、偶像礼拝から真の神の礼拝へ立ち帰った者はみな、神の選民に加えられるのであった。イスラエルは人数が増えるにしたがってその境界をひろげ、彼らの国は全世界を包含するに至るはずであった。

神は万国の民を、ご自分の憐れみある統治下に引き寄せたいと望まれた。神は地球を、喜びと平和でみたしたいとお望みになった。神が人をお造りになったのは、人を幸福にするためであった。そして、人の心を天の平和でみたしたいと願っておられる。神は地上の家族が天の一家族の象徴となるように望んでおられる。

しかし、イスラエルは神のみ旨を成就しなかった。「わたしはあなたを、まったく良い種のすぐれたぶどうの

木として植えたのに、どうしてあなたは変って、悪い野ぶどうの木となったのか」と主は言明なされた（エレミヤ1：21）。「イスラエルはむなししいぶどうの木であって、自分自身のために実を結ぶ」（ホセア10：1 英語欽定訳）。「それで、エルサレムに住む者とユダの人々よ、どうか、わたしとぶどう畑との間をさばけ。わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか。わたしは良いぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、どうして野ぶどうを結んだのか。それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、あなたがたに告げる。わたしはそのまがきを取り去って、食い荒されるにまかせ、そのかきをとりこわして、踏み荒されるにまかせる。わたしはこれを荒して、刈り込むことも、耕すこともせず、おどろと、いばらとを生えさせ、また雲に命じて、その上に雨を降らさない……。主はこれに公平を望まれたのに、見よ、流血。正義を望まれたのに、見よ、叫び」（イザヤ5：3－7）。

主はモーセを通して、不従順であればその結果がどんなものかをその民に示しておられた。彼らは、もし契約を守ろうとしないなら、自分自身を神の生命から遮断することになり、神の祝福はもはや彼らに臨むことができない。モーセはこう言った、「あなたは、きょう、わたしが命じる主の命令と、おきてと、定めとを守らず、あなたの神、主を忘れることのないように慎まなければならない。あなたは食べて飽き、美しい家

を建てて住み、また牛や羊がふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、おそらく心にたかぶり、あなたの神、主を忘れるであろう……。あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言ってはならない……。もしあなたの神、主を忘れて他の神々に従い、これに仕え、これを拝むならば、一わたしはきょう、あなたがたに警告する。—あなたがたはきっと滅びるであろう。主があなたがたの前から滅ぼし去られる国々の民のように、あなたがたも滅びるであろう。あなたがたの神、主の声に従わないからである」(申命記8：11 - 14、17、19、20)。

ユダヤ人は、この警告をかえりみななかった。彼らは神を忘れ、神の代表者としての特権を見失った。彼らがどんなに祝福されても、それは世界になんの祝福ともならなかった。彼らの特権はことごとく、自分たちの名誉を高めることに当てられた。彼らは神の要求なさを奉仕をおこたり、同胞に宗教上の指導と聖なる模範をたれることをしなかった。彼らは洪水(こうずい)前の世界の民と同じく、その邪悪な心が考え出すままに行動していた。こうして彼らは「これは主の神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ」といいながら、聖なる事柄を世俗的なものと化すとともに、神の品性を誤ってあらわし、聖なる神のみ名を傷つけ、聖所を汚していた(エレミヤ7：4)。

主のぶどう園を託された農夫は、その信任に不忠実であった。祭司や教師は民を忠実に教えなかった。彼らは神のいつくしみと憐れみを人々の前にかかげず、神に対して彼らの愛と奉仕をささげなければならないことを示さなかった。これらの農夫は自分の名誉を求めた。彼らは、ぶどう園からとれる実を専有したいと望んだ。彼らは、人々の注目と尊敬を自分に集めようとばかり気をつかった。



これらイスラエル指導者の罪は、普通の人の場合の罪と同じではない。彼らは神に対して最も厳粛な義務を果たさなければならなかった。彼らは「主はこう言われる」というその事柄を教え、全き従順を日常生活において実践することを誓っていた。ところが彼らはそれを守らず、かえって聖書を誤用した。彼らは人々に重荷を負わせ、生活のあらゆる面にまで儀式を強いた。人々は、ラビの規定した要求を満たすことができずに、絶えず不安な気持ちをもって生活していた。彼らは人の作った戒めが守れないものであることを知って、神の戒めをも捨ててしまった。

神がぶどう園の領主であり、民の所有物は、みな神

のために用いるように委託されたものであることを、主は人々にお教えになった。しかし祭司や教師はその神聖な職務を、神の財産を扱う態度で遂行しなかった。彼らは、みわぎの前進のためにゆだねられた資力や便益を、常習的に盗んでいた。彼らは、どん欲のために異邦人からさえ軽べつされるほどであった。こうして、異教の世界は、神の品性とみ国の律法を誤解するようになってしまった。

神は父親のような心で、人々を耐え忍ばれた。神は、時に憐れみを与え、また時には憐れみを取り去って、彼らに訴えられた。神はたゆまず彼らの罪を彼らに示し、しんぼう強く彼らがそれを認めるのを待ち続けられた。預言者たちや使いの者たちが送られて、農夫に対する神のご要求を力説した。しかし彼らは歓迎されるどころか、敵のように扱われた。農夫たちは彼らを迫害して殺した。神はまたほかの使者をつかわされたが、彼らもはじめの使者たちと同じ扱いを受け、農夫たちは前にもまして激しい憎悪ぞうおをあらわした。

神は最後の手段として、「わたしの子は敬ってくれるだろう」と思って、ご自分のみ子をつかわされた。しかし反抗のために執念深くなった彼らは、「あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう」、そうすればぶどう園はわたしたちの手に入り、その実は自分勝手にすることができるのだと語りあった。

ユダヤのつかさたちは、神を愛していなかった。だから、彼らは神から離れ、正しい解決をお求めになった神の申しいを、拒絶したのであった。神の愛する子キリストがぶどう園の領主の権利を擁護するためにこられたが、農夫たちは、わたしたちはこの人に治められるのを好まないと言って、彼を侮辱した態度をとった。彼らはキリストの品性の美しさをしっとした。キリストの教え方は彼らよりはるかにすぐれていて、彼らはその成功を恐れた。主は彼らの偽善をあばき、その行為の結果を示して、彼らに抗議なされた。このことが彼らを狂気のようにした。彼らは、否定することのできないその非難の言葉に激怒した。彼らは、キリストがいつも示される義の高い水準を憎んだ。彼らは、その教えが自分たちの利己心をあばくものであることを知り、彼を殺そうと決意した。彼らは主の示される誠実と敬虔の模範と、そしてそのあらゆる行為にあらわれる高い靈性を憎悪した。主の生活は、すべてが彼らの利己心を譴責するものであった。そして最後の試み、すなわち永遠の生命に至る従順か、永遠の死に至る不従順かを決定する試みが来た時、彼らはイスラエルの聖者を拒絶してしまった。彼らはキリストかバラバかそのどち



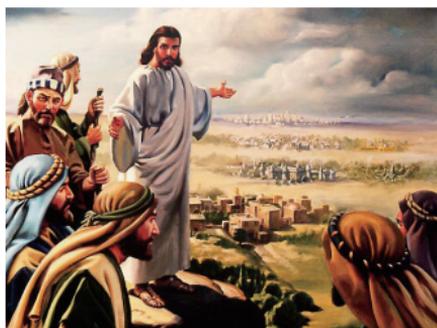
らを選ぶかと聞かれた時、「バラバをゆるしてくれ」と叫んだ（ルカ 23：18）。そしてピラトが「それでは……イエスはどうしたらよいか」と問うたとき、彼らは「十字架につけよ」とはげしく叫んだ（マタイ 27：22）。ピラトが「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」と言うと、祭司やつかさは「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」と答えた（ヨハネ 19：15）。ピラトが手を洗って、「この人の血について、わたしには責任がない」と言うと、祭司たちは無知な群集と共に、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と断言した（マタイ 27：24、25）。

こうしてユダヤの指導者たちは、ついにこのような道を選んだ。彼らの決定は、いかなる人も開くことのできない書にしるされた。ヨハネはこの書が、み座にいます方の手にあるのを見た。この決断は、ユダ族のししによってこの書が開封される日に、彼らの前に明らかにされ、彼らはその報復を受けるのである。

ユダヤ民族は、自分たちは天の寵愛ちょうあいを受けており、神の教会としていつどんな時でも称揚されることができると考えていた。彼らは、自分たちはアブラハムの子だと言明していた。そして彼らの目には、その繁栄の基礎はゆるぎのないものに映じ、その権利を奪えるなら奪ってみよと、天地に公言してはばからなかった。

しかし彼らは、その不忠実な生活を送ることによって、自らに罪の宣言を下し、神から切りはなされるために道を開いたのであった。

ぶどう園のたとえの中で、祭司たちの前にその最後の悪行を描き出したあと、キリストは彼らにこう問われた、「このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか。」祭司たちは興味深くこの話の筋をたどってきたが、彼らはこのたとえのテーマと自分たちとの関係を何も考えずに、人々と一緒になって、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」と答えた。



彼らはそれと知らずに、われとわが身に宣告をくださったのだった。イエスは彼らを見つめられた。鋭い凝視を受けた彼らは、心の秘密が読みとられたことを悟った。イエスの神性が、誤解の余地のない力をもって、彼らの前にきらめいた。彼らはこの農夫たちというのは、自分たちのことをさしているのを悟ったが、とっさに「そんなことはない」と、それを打ち消した。

イエスは厳粛に悲しげに尋ねられた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう。」

もしユダヤ人がキリストを受け入れたとすれば、キリストはユダヤの国を滅びから救おうと望んでおられたのである。だが、ねたみとしつとのために彼らの心は執念深くなっていた。彼らは、ナザレのイエスをメシヤとして受け入れないことに心を定めてしまった。彼らは世の光をしりぞけ、それ以来、彼らの生活は暗夜のような暗黒に閉ざされた。

予言されていた運命が彼らを襲った。滅亡は、はげしい欲情のままに放縱な生活におちいった、彼ら自身の招いたものであった。彼らは怒り狂って、たがいに殺しあった。彼らの頑固さと反逆的な



高慢さが、ローマの征服者たちの怒りを招いた。エルサレムは滅ぼされ、神殿は廃虚と化し、その跡は畑のように掘り返された。ユダヤ人はせいさんな死をとげた。幾百万の人々が奴隷に売られ、異邦諸国で働く身になった。

ユダヤ人は民族として、神のみ旨をはたすことができなかった。そしてぶどう園は彼らから取り去られた。彼らが乱用した特権、彼らが軽んじた務めは他の者たちにゆだねられた。

## 今日の教会



ぶどう園のたとえば、ユダヤ民族にだけあてはまるのではなく、それはわたしたちが学ぶべき教訓でもある。現代の教会は、大きな特権と祝福を神から受けており、神はそれにふさわしい感謝の行為を期待しておられる。

わたしたちは、高い身代金によってあがなわれた。わたしたちは、この身代金の価が大きなものであったことから考えて、それがどんなに大きな結果をもたらすものであるかを知ることができるのである。土が神の子の涙と血でうるおされたこの地上は、パラダイス

の尊い実を結ばなければならない。神の民の生活のなかに、み言葉の真理の栄光と美とがあらわれなければならない。キリストは、神の民を通してご自分の品性とみ国の原理を示さなければならない。

サタンは、神のみわざを破壊しようとして、サタン自身の原則に従うように人々を勧誘している。サタンは、神の選民があたかも惑わされた民であるかのよう  
に言いふらすのである。彼は兄弟らを訴える者であつて、そのとがめだては、義を行う人々に向かって発せられる。神は、神の民が義の原則に従順であればいかなる実を結ぶかを示して、サタンの訴えに答えることを望んでおられる。

これらの原則は、クリスチャン個人において、家庭において、教会において、また神の奉仕のために立てられたあらゆる機関において、明らかにされなければならない。これらはみな、世のためにどれほどのことがなされるかという象徴でなければならない。それらは、福音の真理にはどんな救いの力があるのかを示す型でなければならない。これらはみな、神が人類に対して持つておられる大いなるみ旨を、成就する手立てなのである。

ユダヤの指導者たちは、彼らの壮麗な神殿と印象的な宗教行事の儀式とを誇りにしていたが、義と憐れみと神への愛が欠けていた。神殿の壮観もその奉仕の華

麗さも、彼らを神に嘉納<sup>かのう</sup>されるものとするにはできなかった。すなわち、彼らは、神の目に価値のある唯一のものを、ささげていなかったのである。彼らはへりくだった、くだけた精神を神のもとに携えてこなかった。儀式がはなばなしくなり、多岐にわたるに至るのは、神の国の根本原理が失われた時である。誇りと外見を重んじて、壮麗な教会建築や、華美な装飾や、人目を引く儀式を求めるのは、品性の形成がおろそかにされ、魂の飾りが欠け、純真な敬神の念が見失われた時である。こうしたことがいくら重ねられても、神はあがめられない。儀式と虚飾と誇示から成る一般の教会は、神に受け入れられるものではない。その礼拝は天来の使者から、いかなる応答をも得ることができない。



教会は、神の目に非常に尊いものである。その外面の装いではなく、世とは全くかけ離れた誠実な敬神さのゆえに、神は教会を重んじられるのである。神は、その教会員がキリストを知る知識にどの程度成長しているか、また、霊的な経験にどの程度進んでいるかによって教会を評価なさる。

キリストはそのぶどう園から、聖潔と無我という実

を得たいと渴望しておられる。キリストは、愛と善意の原則を求めておられる。いかなる美術品であっても、キリストの代表者である人々のうちに、現されるべき性質と品性の美には匹敵できない。信ずる者を生命から生命に至る香りとし、そのわざに神の祝福をもたらすものは、彼の魂をつつむ恵みの雰囲気である。

教会の会衆は、その国の人々の中で、最も貧しいものであるかもしれない。みたところ、人の目を引くものは何もないかもしれない。しかし、もし彼らがキリストの品性の原則を所有しているなら、彼らの魂にはキリストの喜びが宿るのである。天使も彼らの礼拝に加わり、感謝と心からの賛美は甘美なささげものとして神のもとに上る。

主はわたしたちがそのいつくしみを述べ、その力を語るようにと望んでおられる。わたしたちが賛美と感謝を表現する時に、主はあがめられる。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」と主は言われる（詩篇 50：23）。イスラエルの民は、荒野を旅したあいだ、聖なる歌をもって神をたたえた。主の戒めと約束を曲に合わせて、イスラエルの人々が長い荒野の旅をしながらうたったのである。また、カナンにおいては、聖なる祭りに彼らが集う毎に、神のくすしきみわざについて語り、そのみ名への感謝をささげた。神は、その民の全生活が賛美の生活であるようにお望みになった。

こうして神の道は「あまねく地に知られ」、神の「救の力がもろもろの国民のうちに知られる」のであった（詩篇 67：2）。

今も、このとおりでなければならない。世界の人々は偽りの神々を拝んでいる。彼らをそのような間違った礼拝から、引き離さなければならないが、それは偶像を非難することによってではなくて、それよりも更にすぐれたものを見せることによってでなければならない。神のいつくしみを人々に知らせなければならない。「『あなたがたはわが証人である』と主は言われる」（イザヤ 43：12）。



主は、わたしたちが偉大なあがないの計画をよく理解し、神の子供たちとしての大いなる特権を認識し、感謝しつつ従順にそのみ前を歩むことを、望んでおられる。主はまた、わたしたちが毎日喜びつつ、新しい生命にあふれて主に仕えることを望んでおられる。小羊の命の書に名前を記された感謝と、またわたしたちのためにみ心をお痛めになる神に、わたしたちの心配事をおまかせすることのできる感謝とが、わたしたちの心のうちにわいてくるのを、神は望んでおられる。わたした

ちは主の嗣業であり、キリストの義は聖徒の白衣であり、わたしたちには、救い主がまもなくおいでになるという祝福にみちた望みがある。それであるから主は、わたしたちに喜べとお命じになるのである。

真心から神をたたえることは、祈りと同様の義務である。罪におちいった人類への神の驚くべき愛を感謝するとともに、神の無限の富の中から、いっそう大きな祝福を受けることを待望していることを、わたしたちは世界と、そしてすべての住民たちに示さなければならない。わたしたちは今より以上に、もっと自分のとうとい体験を語る必要がある。聖霊が特別に注がれると、主にある喜びとその奉仕における能力とは、神の子らに対する神のいつくしみと驚くべきみわざをわたしたちが語ることによって、著しく増大するであろう。

こうしたことは、サタンの力を後退させる。それはつぶやきと不平の精神を取り去り、誘惑者を退却させる。それは地上の住民の品性を天の邸宅を継ぐにふさわしく涵養する。

こうした証しは人々に感化を及ぼす。魂をキリストにかち取るのに、これ以上有効な方法はない。

わたしたちは実質的な奉仕をして一み名の栄光を増すためにできるかぎりのことをして一神をたたえるべきである。神はその賜物をわたしたちに分け与えられ

るが、それはわたしたちも与え、こうして神のご品性を世に知らしめるためである。ユダヤの制度において、ささげ物は神の礼拝の重要な部分を占めていた。イスラエル人は、全収入の10分の1を聖所の奉仕にささげるように教えられていた。そのほかに彼らは、罪祭、任意のささげ物、感謝のささげ物などをたずさえてくることになっていた。これらは当時の福音の働きをささえる方法であった。神は昔の民に期待なさったと同じものを、わたしたちにも期待しておられる。魂の救済という大事業は、押し進めていかなければならない。神は、10分の1やその他のささげ物を、このみわざのためにお充てになった。神はこうして福音の働きを維持しようと意図しておられる。神は10分の1をご自分のものと主張なさるのであるから、いつでもそれは聖なる保留物とみなされ、み事業のために神の宝庫に納めなければならない。神はまた、任意のささげ物と感謝のささげものをお求めになる。このすべては、福音を地のはてにまで伝えるために用いられるものである。

神への奉仕には個人的な働きが含まれている。わたしたちは個人的に努力して、世の救いのために神と協力しなければならない。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」というキリストの言葉は、主に従う1人1人に語られている（マルコ16：15）。キリストのお与えになる命に入るように定め

られた者はみな、同胞の救いのために働くように定められたのである。彼らの心は、キリストの心と1つになって鼓動する。キリストが魂に対して感じておられるのと同じ渴望が、彼らのうちにもあらわされる。みわざにおいて、すべての者が同じ所を占めることはできないが、すべての者にはそれぞれ占めるべき所と働きがあるのである。



昔アブラハムもイサクもヤコブも、柔和で知恵深かったモーセも、種々の才能に恵まれていたヨシュアも、みな神の奉仕に参加した。ミリアムの音楽も、デボラの勇気と敬神の心も、ルツの嫁としての情愛も、サムエルの従順と誠実も、エリヤの確固とした忠誠も、エリシャの穏やかな感化力も、そのすべてが必要であった。このように今でも、神の祝福を受けた者はみな、实际的な奉仕によって答えなければならない。あらゆる才能を、み国の発展とみ名の栄光のために用いなければならない。

キリストを個人的な救い主として受け入れる者はみな、福音の真理とその救いの力の立証をしなければならない。神がお命じになることは、必ずそれをなしと

げることができるように備えがされているのである。神の要求なさることは、キリストの恵みによってことごとくなしとげることができる。天の富が全部、神の民を通してあらわされるべきである。「あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう」とキリストは言っておられる（ヨハネ 15：8）。

神は、全地がご自分のぶどう園であると主張なさる。たとえ今は横領者サタンの手の中にあるとはいっても、これは神の所有である。創造によると同時に贖罪によっても、これは神のものである。キリストの犠牲は世界のためになしとげられた。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」（ヨハネ 3：16）。

この賜物が1つ与えられたことによって、ほかのすべての賜物が人々に与えられるのである。全世界は、日毎に神の祝福を受けている。恩を忘れた人類にそそがれる1しずくの雨、ひとすじの日光、また1枚の葉、1つの花、1つの実など、その1つ1つは神の寛容とその偉大なる愛を証している。

ところで、この偉大な賦与者にどんな返礼をしているだろうか。人々は神のご要求をどう扱っているだろうか。人類の大多数は、一体何に奉仕をささげているだろうか。彼らは実に、富に仕えているのである。この世における財貨と地位と快樂が彼らの目標である。

彼らは人からだけでなく、神からも奪うことによってその財貨を得ている。人々は利己心を満足させるために、神の賜物を用いている。彼らの握ることのできるものはことごとく、そのどん欲と利己的な快樂を求めることのために充てられている。

今日の世界の罪は、イスラエルに滅亡を招いた罪と同じものである。神への忘恩、機会と恩恵をなおざりにすること、神の賜物を独り占めにすること—これらがイスラエルに怒りを招いた罪のもとであった。それはまた、今日の世界にも滅びをもたらしつつあるのである。

キリストが、オリブ山から神に選ばれた都をながめながら流された涙は、独りエルサレムのための涙ではなかった。エルサレムの運命の中に、主は世界の滅亡を見ておられた。

「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている」（ルカ 19：42）。

「この日に」—その日は今、暮れようとしている。あわれみと特権の期間は、もうほとんど残っていない。報復の雲はたちこめてきている。神の恵みをこぼんだ者たちは、急速な滅亡、とりかえしのつかない滅亡に、まさに巻き込まれようとしている。

だが世界は眠っている。人々は自分たちの審判の時を知らない。

この危急の時に、教会はどのような態度をとっているだろうか。教会員は神のご要求に応じているだろうか。またその任務をまっとうし、世に神のご品性をあらわしているだろうか。彼らは最後の憐れみの警告に同胞の注意を促しているだろうか。



人類は危険にさらされている。大衆は滅びようとしている。だがキリスト教徒といわれている人々の間で、これらの魂に重荷を感じている者はなんと少ないことだろう。世界の運命が決定しようとしているのに、これまでに人類に与えられた最も遠大な真理を信ずると主張する者たちでさえ、この事実にはほとんど心を動かされていない。キリストが天の家郷を去り、人性をもって人性に接触し、人性を神性に引きつけるために、みずから人間の性質をおとりになったあの愛が、彼らに欠けている。神の民は無感覚のまひ状態におちいつて、今何をすべきかに気づかないのである。

イスラエルはカナンに入った時、全地を占領して神のみ旨をはたすべきであったが、そうしなかった。彼

らは一部の領土を征服すると、ただ勝利を治めたところに落ちついてしまった。彼らはその不信仰と安逸を求め心とから、すでに征服した所にかたまってしまい、新しい地域の占領に向かって前進しようとしなかった。こうして彼らは神から離れはじめた。神のみ旨をはたさなかった彼らは、神が祝福に満ちた約束を果たすことができないようにした。今日の教会も同じことをしていないだろうか。福音を必要とする全世界を目の前にしながら、キリストを言い表す者たちは、福音の特権をたのしむことができるところにかたまっている。彼らは新しい地域に乗り出して、救いのおとずれを遠隔の地方に伝える必要を感じていない。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」というキリストの任命を彼らははたそうとしていない（マルコ 16：15）。ユダヤの教会と比較して、彼らの罪は軽いと言えるだろうか。

キリストに従う者であると公言する者たちは宇宙の前でさばかれている。ところが、彼らの神に対する奉仕が不熱心で努力が足りないために、彼らは不忠実のそしりをまぬかれることはできない。もし彼らのしていることが全力を尽くしているのであれば、彼らは非難を受けないであろう。だが、神の働きに心をこめてするなら、彼らはさらに多くのことをなしうるはずである。彼らが自己否定と十字架を負う精神を大部分失っていることは、彼ら自身も知っていれば世も知ってい

る。天の記録に、生産者ではなく消費者としてその名前が書きこまれる者が大勢いる。キリストのみ名をかかげる多くの者によって、キリストの栄光は曇らされ、その美はおおわれ、その誉れははばまれている。



名前は教会の名簿に載っていても、実際にキリストの統治の下にいない者が多い。彼らは主の教えをかえりみず、主の働きを行っていない。従って彼らは

敵サタンの支配下にいる。彼らは積極的な善をしない。したがって彼らは、はなはだしい害を及ぼしている。なぜなら、彼らの感化は生命から生命に至る香りではなく、死から死に至る香りだからである。

「わたしはこれらの事のために彼らを罰しないでいられようか」と主は言われる（エレミヤ5：9）。神のみ旨を果たさなかったために、イスラエルの子らは退けられて、神の招きはほかの国々の人々にさしのべられた。だが、もし彼らも不忠実であれば、同じように拒まれるのではなかろうか。

ぶどう園のたとえの中で、キリストが罪を宣告なさったのは農夫たちであった。土地から生じた産物を、主人に返そうとしなかったのは彼らであった。ユダヤ民

族の場合、民を誤り導いて、神が求めておられる奉仕を神にささげないようにしたのは、祭司と教師であった。民族をキリストから離れさせたのは彼らであった。

キリストは人間の言い伝えの混じらない神の律法を、従順の大標準としてお示しになった。ラビたちはこのことによって敵意をいだいた。彼らは人間の教えを神のみ言葉以上のものとして、民を神の戒めから遠ざけていた。彼らは、神のみ言葉の要求に従うために、人の作った戒律を捨てようとはあえてしなかった。彼らは、真理のために、理性の誇りと人の賞賛とを犠牲にしようとはしなかった。キリストが来て、神の要求を民族に示された時に、祭司や長老たちは、彼らと民の間に介入なさるキリストの権利を認めなかった。彼らはキリストの譴責と警告を受け入れようとはせず、かえって民をキリストに逆らわせ、キリストをなきものにしようとはかった。

キリストを拒んだことと、それによって生じた結果に対する責任は彼らにあった。1つの民族が罪を犯し、滅びていった原因は、その宗教指導者たちにあった。

わたしたちの時代にも、これと同じ勢力が働いていないだろうか。現在、主のぶどう園で働く農夫たちのうちに、ユダヤの指導者の二の舞を踏んでいる者が多いのではないだろうか。宗教指導者たちは、神のみ言葉の明白な要求から人々を引き離してはいないだろう

か。彼らは人々に神の律法への従順を教えるのではなく、罪を犯すことを教えているのではないだろうか。人々は、多くの教会の講壇から、神の律法は拘束力を持たないものであると教えられている。人間の言い伝えや儀式や慣習が称揚されている。神の賜物を与えられたことに対しては、誇りと自己満足の気持ちがいだかれている一方、神の要求は無視されている。

人々は、神の律法を拒むということがどういうことなのかを理解していない。神の律法はそこご品性の写しである。それはみ国の原則を具体化したものである。この原則を拒んで受け入れない者は、神の祝福を受けることができないようになってしまう。

イスラエルの前途にあった輝かしい将来は、神の戒めに従うことによってはじめて、実現されうるものであった。同じように品性が向上し、同じ祝福にあふれて、一精神と魂と身体の祝福、家と畑の祝福、現世と来世の祝福に満ちあふれること一は、従順によってのみわたしたちに可能となるのである。

自然界におけると同じく霊的な世界においても、神の法則への従順が、実を結ぶための条件である。そして神の戒めを無視することを人に教えるなら、それは神の栄光のために実を結ぶのを妨げることである。そのように教える者は、主のぶどう園の収穫を主に返さない罪を問われるのである。

神の使者たちは、主の命令を受けて、わたしたちの所にやって来る。彼らは来て、キリストが求められたと同様に、神のみ言葉に従うことを求める。彼らはぶどう園の収穫一愛と謙遜と自己犠牲的奉仕の実一を求める権利が主にあることを教える。これを聞いて、ぶどう園の農夫たちの多くは、ユダヤの指導者たちと同じように怒りをいだくのではないだろうか。神の律法の要求が民の前に置かれる時、これらの教師たちは、自分の影響下にある人々に、神の律法を拒むようにさせるのではないだろうか。そうした教師を神は不忠実な僕と呼ばれるのである。

古代イスラエルに対して言われた神の言葉は、今日の教会とその指導者たちに対する厳粛な警告である。イスラエルについて主は言われた、「わたしは彼のために、あまたの律法を書きしるしたが、これはかえって怪しい物のように思われた」(ホセア 8 : 12)。また祭司や教師に主は言われた、「わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨てる……。あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、わたしもまたあなたの子らを忘れる」(ホセア 4 : 6)。

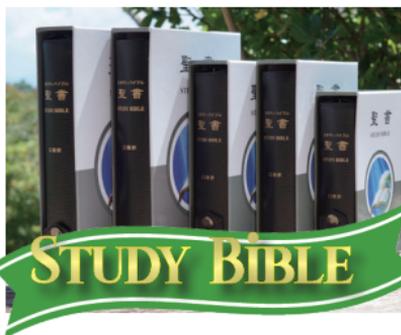




神の警告に、なんの注意をも払わずに見すごしてよいであろうか。奉仕の機会を活用しないでよいであろうか。世のあざけり、理性の誇り、人間の慣習や言い伝えの尊重などのために、キリストの弟子と公言する者が、キリストに対する奉仕をしないでよいであろうか。キリストの弟子であると公言する者は、ちょうどユダヤの指導者たちがキリストを拒んだように、神のみ言葉を拒むのであろうか。イスラエルの罪の結果は、わたしたちの前に明らかにされている。今日の教会は警告に従うであろうか。

「もしある枝が切り去られて、野生のオリーブであるあなたがそれにつがれ、オリーブの根の豊かな養分にあずかっているとすれば、あなたは…… 誇ってはならない……。彼らは不信仰のゆえに切り去られ、あなたは信仰のゆえに立っているのである。高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。もし神が元木の枝を惜しまなかったとすれば、あなたを惜しむようなことはないであろう」(ローマ 11 : 17 - 21)。

もっと詳しく研究なされたい方のために...



## スタディバイブル

口語訳・注解・  
脚注引照付き・地図  
チャート・聖句索引

¥8,000～

色はすべて黒で本革を使用

宇宙の謎、地球の謎、人生の謎に真実の解決を与えるのは聖書だけです。スタディバイブルは自分で研究できるように編集されています。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

主のぶどう園 -リバイバルシリーズ-

※頒布価格 100 円

発行 平成 26 年 3 月 16 日

著者 エレン・ホワイト

発行所 サンライズミニストリー

〒 905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

電話 0980-56-2783

FAX 0980-56-2881

Email [info@sunriseministry.com](mailto:info@sunriseministry.com)

[www.sunriseministry.com](http://www.sunriseministry.com)



# リバイバル小冊子シリーズ

---

No.1 安息日問答

No.2 アピール

No.3 装身具について

No.4 狭き道の旅

No.5 リバイバルと改革

No.6 神の聖安息日の遵守

No.7 今

No.8 終末時代における霊の賜物

No.9 小さな光と大きな光

No.10 預言の霊に関する指導原理

No.11 サタンのわな

No.12 人類が直面している世界情勢

No.13 田舎の生活

No.14 十戒

No.15 主のぶどう園

No.16 背教のアルファ

No.17 終わりの時に備えよ

No.18 どのようにして安息日を守るのか

No.19 キリスト論

No.20 救いの確証

No.21 もうひとつの箱船

